

東郷村報

第105号

昭和35年8月10日

発行所

宮崎県東臼杵郡

東郷村役

日向市富高

株式会社 安藤印刷所

電話 64番

先進地視察報告書

東郷村議会総務部委員長 矢野通

一、小布施町について
三月二十日長野県上高井郡小布施町役場を訪問する。

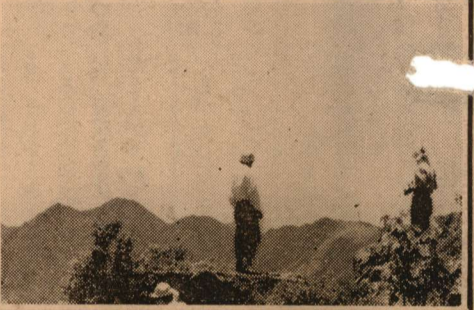
議会報告

七月臨時村議会は七月二十八日午前九時村議会議事堂に召集され、会期一日で次の事件について審議の結果...

失業対策事業の開始について

最近、全国的に、あらゆる企業のオートメーション化による反響として、失業者が増加しているといわれています。

<大崩登山>7月12、13、14の3日間、青年達が奈須、竹下両村教主事につれられて大崩に登り、「山のぼり」の壮快さを満喫した



御協力を期待する次第です。失業者が発生することは決して好ましいことではありません。

村税の二、三徴税について
村税の徴税につきましては、昨年末から強力な態勢で実施し各納税者の協力を得て村の従来状況からみず

村政に対する私見

坪谷 陶山 勲

私は村政の根幹となるものは、何と申しましても「村民の幸福を如何にして高めに行くか」以外にはない。

第一であつて、村民は年々収入が増加するように思われますが、この収入を増加せしめるには農山村では産業振興以外にはない。

八月は村民税二期の納期です。八月三十一日まで納めてください。



八月は村民税二期の納期です。

八月三十一日まで納めてください。

に納めてください。

山の雲

朝空に黄雲たなびき 朝霧は空にのぼりて たなびき 真青き峽間ひとりこそ行け



大谷村道改良工事風景

牧水

雨待てる信濃の国の四方の峰のゆふべゆふべを黄雲たなびく

村婦協宿泊講習会

本村婦人指導者講習会を七月二十七日、二十八日の二泊二日で、東郷小学校で開きました。参加者は各区正副会長、各グループ会長約九十名で大へん盛会でした。

家の光普及について

東郷村農業協同組合

かねて農協が取扱つておりました家の光は東郷村の皆様に最も親しまれ、ために先生は宮崎農専出身で終戦後開拓農民となられた方で現在一町八反の耕地に乳牛三頭を飼つておられるそうです。奥さんは女子大出身で、お父さんがお夫と汗を流しながら土に親しまれておられる姿の中にも、尊いものがあるように思われました。

第一分科会 主婦の自由時間をいかして作り出すか
第二分科会 青少年を正しく育てるにはどうしたらよいか
第三分科会 部落学級の進め方
第四分科会 生産を高め収入の増大をはかるにはどうしたらよいか

午後四時三十分から約一時間「おどり」を東郷小学校の橋山先生に教えていただきました。会員の方々はすっかり童心に帰つて楽しいひとときでありました。夜は映画を観賞いたしました。その感想の発表会などとして第一日を閉じました。第二日は初めに「会員意識を高めるにはどうしたらよいか」の題でパネル討論をいたしました。会員代表の外に東郷中学の岩切校長先生や福瀬の公民館長さんからも列席していただき、御意見をうけたまわること

婦協宿泊講習会



りを中心にして会員の活潑な意見が出てまことに有意義な全体会議でした。お別れの中食会、その後、昨日から稽古した「おどり」を全員でおどりの時のたつのも忘れて午後二時過ぎ閉会いたしました。

木炭生産者へお知らせ

触媒製炭に補助金がでます

木炭は古くから山村の現金収入源として重要な産業であり、その振興を図るには良質炭をより多く生産して収率をあげる事が一番であります。その間に充分な改善研究がなされ収率については、すでに限界に達したといわれております。

- 仲野 輝子
- 中野 幸子
- 須崎 節子
- 藤吉 次郎
- 佐藤 利次郎
- 高口 敏子
- 飛田 高敏子
- 下渡川 子

部落担当職員は上記の製炭を実施したときはその製炭に使用した薬剤の経費について三十五年度から補助金がでることとなつたので生産者ごぞつてこの製炭事業を行い今後益々良質炭の増産につとめると共に伝統ある日向木炭の価値を高揚いたします。

スポット

盆行事について
東郷村公民館
東郷村新生活運動協議会
東郷村婦人連絡協議会
東郷村青年連絡協議会

朝参供養

毎年お盆の十七日に成願寺で朝参供養が行われます。これは元祿三年(今から二百七十年前)藩主有馬永純の家臣(那代)、厩田十郎左エ門の忠政にたえ兼ねた本村の百姓三百かまど、一四二名が安住の地を求め薩摩藩へ逃散しました。途中、高鍋藩で抑留された事が県藩(延岡)に伝えられ、藩からは家老が来て婦村するようにつとめま

読者文藝



あかちゃん

坪小二年 杉田みつ子
うちのあかちゃん、まき子といひます。今年の五月九日、まん一つになりました。ざしきにすわらせておくと、一人であそびます。そして、もう、つたいあるきをしります。だ、ときどきころんでなきます。ときどきはそいでにちかかかつていてあそんでなきます。が、やはりころんでなき

宮崎で汽車から降りると、バスに乗り、すぐ県びやういんにつきました。びやういんを見てあんなに大きき、きれいでびやういんは、中にはいるとまだまだとでもきれいで、それにたくさんの人が来ているのでまたびやういんになりました。ぼくたちは、たくさんの人達と一しよに待合しつて待つていました。「こんなたくさんの人がみんなびやういんか、宮崎の人は、みんなびやういんか」と思いました。

父の「カブ号」
東小五年 小野 孝
この前、父ちゃんは「カブ号」を買いました。一日目はうれしそうな顔をして、夕方近くまで練習しました。何日かたつて、雨が降った。雨は「カブ号」を思いました。僕は「カブ号」を思いました。僕も「カブ号」を思いました。僕も「カブ号」を思いました。僕も「カブ号」を思いました。

足音
坪小六年 三浦 賢治
一人の男が歩いていて、ひちやひちや、足音がする。なんだか気味のわるい足音。遠くから聞えてくる。一人の男の後から、だれかついてくる。くらやみの中から近づいてくる音。くつ音が過ぎた後は、また、静かな夜だった。詩集「白い谷間から」